

## 審査の結果の要旨

氏名 簡 佑丞

本論は植民地期台湾の港湾都市の近代化過程を明らかにした都市史研究である。従来台湾の港湾都市研究は経済史的観点および都市計画史的観点からの研究において一定の蓄積がみられたが、本論のような広い視野から台湾の近代港湾を位置づけた研究はなかった。本研究は築港の構想や政策が確立する以前の過渡期の港湾思想のさまざまなアイデアについて史料を駆使して捉えるとともに土木史的知見を最大限活かしつつ世界史のなかに台湾港湾都市を再定位したという点でも画期的成果とみなすことができる。

本論は緒論と結論および補章を除くと本体部分は5つの章から構成されており、ほぼ時系列的に台湾近代港湾の近代化が詳細に分析されている。

第一章は清末の台湾の開港について近代化前夜の光景が描かれる。すなわち清末の伝統的な港は局所的な水運の船着き場と漁業から生まれた港があり、それらはとくに脈絡もなく散在している状況であった。そこにいくつかの開港場が設定されることになるが、それは内外貿易および交通の接点となることが期待された。台湾における近代港湾のスタートは清末の洋務運動に影響をうけた基隆築港計画が代表的なものであり、それは中国の河港都市・上海がモデルであったとする。

第二章は台湾が日本の植民地として整備されていく、そのもっとも初期段階の港湾構想がテーマである。築港をどのようにするかはまさに当該期の都市アイデアと深く関係し、本章では都市アイデアの所在をめぐるきわめて興味深い考察が展開する。本章は旧海軍関係史料を丁寧に読み解くことから植民地期初期の築港思想が明らかになる。総督府初代総督樺山資紀の築港意見書を嚆矢としてその後の展開をトレースすると、基隆、打狗は鉄道と関係づけられ台湾総督府の対内的あるいは陸的港湾と呼びうる築港思想が支配的であったが、やがて海運業をつかさどる民間有力者による国際貿易論が台頭し、シンガポールなどのアジア国際港と比較した議論が登場する。一方、海軍省の制海権あるいは海権を重視した築港論も有力になり、複数の港のアイデアが乱立する。

第三章は、梅田清次による淡水水運を中心とする台北・淡水の近代港湾構想

が取り上げられ、台湾総督府による不完全な基隆築港と淡水築港論が復活するとともに、国際貿易港と海権論を同時に満たす梅田清次の淡水築港論が登場する。しかし現実的には基隆は台北と鉄道によって連結される方向にシフトし、陸運都市・台北の優位が際立つことになる。

第四章は上記の変化を受けて港湾都市の役割が再構築されていく過程を分析したものである。基隆、打狗の都市域にはあらたに水路が巡らされ、水運と陸運を有機的に関係する複合的交易都市が形成される。台湾総督府は港湾都市を一つの一大交通結節ターミナルと位置づけ、突堤式埠頭が岸壁式埠頭へと変化を遂げるとともに海陸連絡ターミナルが実現する。著者はここに近代港湾の成立をみている。

第五章は近代港湾都市成立後の行方を追跡したものである。一度成立した近代港湾都市にとって土地は稀少な資本へと転換する。近代以降の港湾周辺における土地造成、埋立事業は、まさに近代港湾都市の資本蓄積を背景としたものであって、官有地埋立・工業地帯の形成などが進展していくことになる。

補章では近代防波堤技術の史的展開を扱った特論であり、土木史的にみた台湾港湾の技術的背景が明らかにされている。

以上、本論はきわめて広い視野から植民地期台湾の近代港湾の成立過程について一次史料を駆使して明らかにした良質の都市史である。従来台湾のみならず、日本の近代港湾の成立過程との関係も意識されており、本論が明らかにした事実や視点は都市史研究にとって大きな貢献を果たしたと評価することができる。よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。

以 上